

⑤

松崎明が語る 未来

労働運動の復活

市民との連帯で未来は開かれる

若者の組合離れや正社員の減少による組織率の低下など労働組合を取り巻く状況は厳しく、ワークシェアリングや雇用スタイルの変化など取り組むべき課題も多い。労働組合がカウンターパワーとして再生することは可能なのか？労働運動の将来を聞いた。

(聞き手、『サンデー毎日』編集長・北村肇)

北村 労働運動の今後の課題なども伺いた。まずワークシェアリングについて。失業率が高い中で労使双方から関心が高まっていますが。

松崎 ワークシェアリングは、1994年にドイツのフォルクスワーゲン、ドイツ鉄道などへ行って2年かけて調べて報告書も作りました。

北村 それはどういう認識だったんですか。

松崎 当時から日本経済は、必ず危機に瀕し、失業者が増大すると考えてました。その時うろたえないためです。極端な話、仕事を分けて2分の1の労働で2分の1の賃金になるのは、それ自身は正当です。しかし、それを快しとしない、これも正当です。

すると、ワークシェアリングとは何なのか。やはり、労働者の連帯だと思います。労働組合は弱いものの立場に立ち連帯すべきです。失業者を放置して労働運動は成立しないとの考えからです。だから私はJRには、高卒、大卒を含めて、採用規模を絶対に縮小するなど言ってきた。それは企業の社会的責任です。苦しくても、その時には先輩が、骨身を削る覚悟があるということです。これは、景気のいい時から主張していました。ワークシェアリングで、身を削ることに同意する労働者になろうと、勉強もしてきました。

北村 ドイツの状況を見てどうでしたか？

松崎 日本と、条件が違う。地域性も違う。だから、そんなに簡単にワークシェアリングが実現できるとは思いません。でも、知ることは大事です。

たとえばドイツの場合、伝統的に労使共同決定法があります。この場で、労使協議が十全にかわされる。だから、経営側の一方的な運営の場ではないんです。北村 日本のようにワークシェアリ

ングが、経営陣に都合の良い賃下げという発想にはならないということですね。

松崎 会社のいいなりではなく、組合員の立場に立つことを貫くべきです。首切りをリストラと言い、押しつける側、許容する側、両方とも間違っている。労働者にはもともと生存権があるんです。簡単に首を切らせたり賃下げに応じるのは組合の任務を放棄することになる。

それと勉強になったのは、ワークシェアリングは、安全問題と同時に進めることです。例えば、ポルボの一般路線バスは、衝突した時に運転席が60センチ後ろにスライドする生存空間があり、運転手はそう簡単には死なない。日本の観光バスの運転席の多くは低床式だし危険です。低床式バスの見直しに関しては、うちのバスの組合員が運輸省に働きかけて「安全基準」がつくられた。前面強化・生存空間の確保を実現して、国際的にも高い評価を得ています。安全問題を徹底すれば、仕事も増えるんですね。

北村 JR東日本では具体的にどういうことをやるんですか。

松崎 まだ全然。ただおそらく年配の人は、今までと同じ賃金では難しいでしょう。安全を担保しながら、例えば短区間の運転にする。労働時間の短縮で、その分賃金は減ります。その分で何人かが新しい仕事に就けばいいのではないかといい議論はありますが、具体的には議論してないんですよ。

労働組合主義は憲法が基軸

北村 労働者の連帯は言葉では言えますが、実際問題、非常にむずかしい。例えば関連下請けやパート、派遣、非正社員をどうするかとなると、「俺はいやだ」という話に必ずなるんですね。企業別組合は、そこをどう克服するかですね。

松崎 私たち関連の会社が約90くらいあります。なかなか労働組合を作ろうとしないんですよ。私らは懸命に理解してもらうために努力していますが、慈善事業じゃないですから、組合を作って組合費を納めて、それから連帯だと思えます。パートの方々も組合員になってもらいます。

北村 組合費は、パートの人達にとっては負担が大きい。組合ができて全員部入とは限りません。

松崎 組合員として頑張ってもらいたい。そこで連帯が始まると思います。

北村 松崎さんはいままでよく、労働組合主義ということを書いていますが、内容をもう少し説明してください。

松崎 私の労働組合主義は、憲法を基軸にします。労働組合主義というと、労使協調主義で経営のことを聞くものという間違っただ概念が歴史的にあるが、違います。憲法に保障された労働三権。はっきりとその立場に立って組合主義に徹するんです。そうすると企業戦略や戦術に重大な関心を持たざるを得なくなるんです。

北村 そうなると、労働組合がちゃんと勉強しなくちゃいけません。経営側に太刀打ちできるだけの勉強をするのは、組合にとっても大変なことですね。

松崎 労働組合は、政策立案などは勉強しても、おのずと限界があると思うんです。専門分野で勉強して経験を積んできた経営側とは、情報量が圧倒的に違います。問題は我々が彼らに肉薄するまじめさと勇気、努力があるかどうかです。なければ、労働組合をまともに相手にする気にな

れないと思います。

例えばJR東日本も銀行株などを買って評価損を出したり、土地を買って大損したりいろいろあったが、じゃあこうすべきだったと私らは言えなかった。結果的にはチェックする程度かも知れませんが、その程度の能力はまじめに身につけていく努力は怠らないようにしないとイケないと思いますね。

加えて言うと、女性のトイレは鉄道だけでなくどこへ行っても行列状態でしかも汚い。わかってて改善されていない。私たちは会社幹部に改善すべきだと言い続け、最近改善されつつあります。そういうのも大事です。

北村 社会経済生産性本部の調査では、そういう労使協議制は20年間ぐらい広がってきている。だが、10年前のと比べ、経営側も不熱心になってきて、例えばトップが出ないなど、組合に対してきちんと情報提供しない、フィードバックしないなどの問題報告が出されているんです。

松崎 我々も勉強します。そうすると経営側と議論がかみ合うんですね。かみ合えば、嘘を言ったり不勉強だったりすると、とんでもないことになる。お互いですよ。そういう緊張感が必要なんです。だから、組合内の研修や勉強会、現場把握なども相当やっています。事前事後のレポートを読むのが大変なくらいですよ。

北村 緊張関係は必要ですね。一方で、若い人の組合離れという問題があります。世代的なものもあるとは思いますが、どう組合に引きつけるのかどこの組合でも悩んでいるようですが。

松崎 その通りですね。私たちも悩んでいるし、地方本部や支部、分会の皆さんも大変苦勞しています。労働組合主義と企業内に閉じこもって考えると若者は育たないと思います。組合にネイチャークラブというのがありますが、北海道の大沼にドングリを植えて森を作ろう、北京の城壁周辺に樹を植えようなんて企画すると、けっこう若者が参加するんです。こんなに一生懸命なんだって思う場面があるんですよ。心身に障害のある方たちと北海道へ行く旅は8年間続けていますが、航空会社、自治体へと協力が広がって、若者も本当に成長してますよ。こちらからの問いかけもなしに、若者はダメだと思うのは、大人の傲慢さですよ。

北村 賃上げやボーナスアップ、そういうのは組合の目玉商品ではなくなってきたんですね。

松崎 ないですね。

北村 労働運動自体弱体化してます。憲法28条で団結権など労働三権が保障されていますが、一つの大きな弱点だったと思うのは、労働三権がすべて生存権確立の手段ととらえられたことなんです。戦後の一時期はそうだったと思いますが、そのために個々人の自由や自己決定権がなおざりにされてきたのではないかと。経済自由に偏重して、個人の自由よりも賃上げのために労組に集まる。それらが逆に、労働組合の弱体化を招いたんじゃないかと思うのですが。

松崎 たぶん二律背反だと思います。多くの組合の場合、社員になった途端に組合員です。自分が労働者であるとか労働組合を知らない間に組合費だけ取られる。それで組合に言われたことだけやれば良い。前近代的というか、自我の確立というのが、非常にないがしろにされてきた。

「若者がダメ」は大人の傲慢

北村 組合員という意識が確立されないんですね。

松崎 「動員」という言葉、うちの組合幹部ですらたまに使うんですよ。軍の指令、これが動員なんです。つまり指令で組合員を集める。本当は「参加してもらおう」なんです。そのためには理解が必要で、組合員と個別的に話さなければならない。個人の意思を尊重すれば、組合のやり方に反対だという時もちろんあるんですよ。そこで討論して行って、お互いに共通項を見い出さなければならないのに、そうならずに安易な道を取ってしまう。組合費はチェックオフ。参加は動員。これの克服ができてない。おっしゃる通り、憲法に保障されたまま、自己変革なしにそのまま進んでいるため、組織が疲弊、老朽化して、いろんなウミが出てきている。

北村 そんな中で労働組合が、カウンターパワーとして弱くなってしまった。失礼ながら、松崎さんのお考えあるいは東労組のやっていることは、労働組合のなかで少数派ですね。それをどう広げればいいのかという問題でもあると思います。いまの連合労働運動の状況などと合わせて、どんなふうに考えますか。

松崎 私は、きれいに整った形で労働運動は再生しないと思うんですよ。昨年11月、我々はアフガン救援のためのチャリティコンサートをやったんです。わずか1カ月の準備で、ミュージシャンその他たくさん集まってくれました。かなりの労働組合も賛意を表してくれて、びっくりしたんです。今までお付き合いのなかった労組、旧同盟系も次々と応援してくれた。それからNGO(非政府組織)など草の根の人たちも。我々失礼ながら、この方々を大事にしてこなかったですね。だから、見限られたんですね。でも、私たちがようやく人並みの活動を始めようかという段階になったら、「まだそんな労働組合があったのか」と連帯の輪が広がったんです。私はすごく手応え感じています。

北村 労働組合をもう一回結集して、NGO、NPOに信頼されるようなつながりをもう少し広げていくためにはどうしたらいいですか。

松崎 私たちがまず謙虚にならないといけない。私たちは、正しいことを堂々とやってきた自負がやたらと強いが、ひと皮むけば、スッテンテンに浮いてるんじゃないのか。正当性を主張しても、相手にされない正当性なんて無ですよ。でも、何もやらないとゼロですから、一つでも二つでも広まってきた輪を大事にしたい。アフガンで長い間草の根で努力されてるペシャワール会やJIFF(日本国際親善厚生財団)、JVC(日本国際ボランティアセンター)などの皆さんは地道に活動され実績をつくっています。会員は多くて2000名前後のようです。そういう人達と連携プレーをやっていける全国組織というのは、いまのところ私達しかない。だから他の労働組合にも一生懸命お話をしてお手伝ってもらって、一つひとつつなぐ役割を私達がやっていこうと考えてます。私はかなりニヒルですが、でも開かれる未来があるのかもしれないと思えますね。

生き方を伝える運動へ

北村 人間の生き方、哲学を伝えないと、この国が回復する時はこないのではないか。アフガンの取り組みなんかもそういうことの一つとだと思んですが、労働組合を離れて、一個人として、これからこの国の人達は どうやって生きていったらいいと思いますか。

松崎 私は、あまり組織から離れた自由人としてものごとを発想するという経験がないんです。非常に考え方が硬直的だし、場面場面では、傲慢かもしれません。組織にそういう欠陥はあると思うんです。人間の生き方のようなところに思いを致した闘いや活動を長い間放棄してきたということが、自分自身の一つの責任だと思うんですよ。

ボランティアという言葉は嫌いですが、でもそれは別に組織がやるんじゃないで個人がやっている。そういう個人を力のないものと、私らはある種大組織の上にあぐらをかいた官僚的な発想で見ている部分があったことは、否定できないんです。

北海道への旅を私が発案してやった時、その頃『週刊文春』に「JRの妖怪」と言われさんざん叩かれたんです。でも、帰る時に車椅子の参加者が握手して「松崎さん、いつまでも“妖怪”でいてくれよ」と言ってくれた。涙出ましたよ。そういう涙を共有できたんですよ。

そういう個人としての発信ということが私自身はできていなかったですね。組織として関わり、個人としてもう一度ものごとをしっかりと考え直しています。結局、大組織は、個人の役に立たないのでは思ったりしますが、やがて労働組合が無力化する中で「そうじゃないよ」というのが突きつけられると思うんです。私はあり得べき組織と、組織を作る個人の両者を考えていく導火線にでもなれたらと思います。私らはいまアフガン救援で新聞広告を出したりしていますが、関係のある7カ国の労組共同で出そうと思っているんです。また現地事務所の設置なども検討しています。

そんな中で、「労組もまったくダメでもないな」と気がついてくれる人が間接的にでも出てきてくれば、市井の個人も、少し私達を信頼してくれることがあるかもしれないと思っています。

一生懸命、労働組合の復権、人間復権、そして反戦・平和のためにも頑張ろうという努力をする以外ないですね。

(おわり)

サンデー毎日2002年2月12日号掲載